

方向

第一一二号 一九九〇年三月五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

中野逍遙『遺稿』中の「春夢子」と「なつこ」 1990.2.16. 原田憲雄

—二宮俊博氏の論考にうながされ若林芳樹氏の示教により—

ことし一月十六日、未知の二宮俊博氏から十九世紀末のすぐれた漢詩人中野逍遙に関する論考三篇を贈られた。

一、『逍遙遺稿』札記 —才子佳人小説との関わりをめぐって— 相山女学園大学研究論集第十八号第二部

二、『逍遙遺稿』札記 —秋怨十絶其七について— 同 第十九号第二部

三、『逍遙遺稿』札記 —故郷の恋人のこと他— 相山女学園大学短期大学部二十周年記念論集

一、二は『遺稿』中に頻出する才子佳人の出拠を、中国の故事や小説にさぐり、先立つ論考の誤りを訂し後来の研究に道を開いている。三は『遺稿』にあらわれ逍遙と交際があった女性の二、三についての考証である。

逍遙が一方的に愛して失った恋人、南条貞子は、有名で、すでに諸家によって言い古されている。

二宮氏は別に、かれの故郷愛媛の宇和島に、幼な馴染みで、かれを愛し、かれも愛情はもったが南条貞子ほどには恋するにいたらず、やがて他に嫁したひとを、「可憐子」という詩の歌う女性にあて、「狂殘痴詩」などに見える「龍膽」の語で象徴する婦人と同じだろうと推察し、かれの母宛ての手紙に言及する「親戚の女」おしづさんなるひとが、そのイメージの原型をなしているのかもしれない、という。

もう一人は逍遙が「春夢子」と呼ぶ女性。二宮氏は本文中に名をあげるだけで、注にわたしの「中野逍遙」を

引かれる。論考にそえた氏の手紙によれば、この引用の縁りで三論考を惠投されたのであった。拙稿は、一九七五年に執筆し、翌年春発行の『人文論叢』第二四号に掲載された。「春夢子」にかかわる部分は次ぎの通り。

春夢女史は『逍遙遺稿』正編にはじめて出る現実の女性の名である。川崎宏「中野逍遙年譜」にはこの人についての考証がなされているかと察するが、いまのわたしは想像によって考えるほかはない。あるいは「慈涙余滴」に描かれるという、神戸から京都への車中で遭遇する少女の成長したすがたでもあろうか。二十六年八月から十月の間に「紀州に遊び、坪井氏に投じ、徐福の墓を訪い、那智の瀑を観る。春夢子と共にす。将に発せんとして、賦して坪井氏に贈る。(坪井氏、名は峰青庵。医を業とす)」と題する詩がある。その後半にいう。

われ孤剣に仗って東都に入る、文学に志を研く十兎鳥。狂才世に倣って節なお高し、瘦骨天を凌いで秋枯れんと欲す。南紀の風光わが眼を過ぐ、筆端たちまち覚ゆ文章の絢。況んや傾蓋至親に許すあり、一片の情は方寸より出でたり。腰下の剣は脱して君に贈るべく、旅程を東望すれば銷魂せんと欲す。離愁漠漠として説き尽くさず、孤鶴唳いて入る海天の雲。

十月、病にかかり山龍堂病院で療養し、さきに引いた「友を扱ばば高世の士、妻を娶らば絶代の人」の句を含む四首が作られる。正編をたどってここまでくると、その「絶代の人」が春夢女史かと疑われる。外編の同時期の諸詩に照らすとその推測がくずれぬ。しかし、やはりさきに引いた「偶感」の「春夢凄涼紀州の月」の句を参照し、それが二十七年の作であることを思うと、春夢とよぶ女性への逍遙の感情が恋愛であったのか友情であったのか断定しにくい。恋愛でなかったとしても、当時はその維持が困難であったろう青年男女間の友情を、すく

なくとも逍遙のほうでは実現しようとして努力したといえようか。(以上)

拙稿執筆のとき逍遙に関する文献は少なかつた。二十五年たつて、日本文学研究者は漢文学作品に注意を払い逍遙に目を向ける人も増えたことが、二宮氏の掲げる文献表によつて察せられる。氏はそれらを精査しておられるようだから、春夢子についての新しい研究があれば古い拙稿を引きはされまい。今もなお明らかでないとするば検討の道をきくらねばならぬ。そんなことをあれこれ案じているときに思いついたのが、和歌山県新宮市で雑誌『燔祭』を出しておられる若林芳樹氏のことである。氏は佐藤春夫の従兄弟で先考は漢詩人、ご自身も詩・歌・俳・文の作者で郷土史に精しい。春夢子は、逍遙が坪井氏の宅を訪い、那智の滝を見るとき同行した。その「紀州」とは新宮に違いあるまい。そこで漢詩人を友とした医師なら、旧家に育ち漢詩人を父にもつ若林氏が知られないはずはない、と思ったのだ。厚かましく恐縮ではあつたが、一月末に「坪井峰青庵と春夢子につき、ご存じよりのことがあつたら……」と示教を乞うた。二月一五日、氏は手紙で教えを与えられた。八十歳を越える大人が、みずから図書館に足を運び、旧藩の文書を複写し、市役所で戸籍まで調査された。この貴重な成果はわたしが独占すべきではない。許しを得て紹介する。以下は若林氏の書翰。前後の文は省略する。

坪井峰青庵 の本名は 蜂音庵 とぶ蜂の羽のたてる音を「ぶ」と聞いたのです。維新のころ書かれた「新

宮藩士連名控」が新宮市立図書館にあり、その中に、三等下級の欄の医師五人の中に坪井蜂音庵があります。

蜂音庵に五男一女があり、一女の名が「スミ」です。春夢女史は、このスミであろうと 存じます。

坪井父子の詩歌については不明です。判ったらお知らせします。

逍遙と交遊があつたのですから詩歌もある

のであろうと存じます。

蜂音庵、新宮藩主水野忠央が桜田門の変の後、隠居を命ぜられ、万延元

年六月十三日、江戸表を出発した時、その伴の中に藩医坪井蜂音庵も加

えられていました。

墓は新宮市南谷にあります。没年 明治三十九年八月二十三日

スミ、蜂音庵の娘、若くして上京、外人について英語を学び、のち甲府

の女学校に教鞭をとられた由。

紀州なる春夢子のもとにつかはしける

松風のわたる垣根に駒とめてきかまほしきは君がつま琴

共に見し那智の巖しら滝秋の雨に水もまさりていわやくすらむ（外篇、詠草六首）

春夢子は、或は逍遙の意中の佳人であつたのではないでしようか。（以上）

岩波本『逍遙遺稿』に（坪井氏、名は峰青庵）とする「峰青庵」は、若林氏の教えから察し「蜂音庵」を誤つたことになる。架蔵の原刊本は外編だけで確かめえないが、内編にも「峰青庵」とあれば、『遺稿』編集の際に

すでに誤っていたことになる。編者の常識からして「蜂音庵」は室名・雅号にふさわぬと感じ、これを誤記と判断し「峰青庵」と意改したのであろう。しかし逍遙が「坪井蜂音庵氏」とせず（名、蜂音庵）と記したのは、

第三等下級並 三名

坪井蜂音庵
奥田養浩
垣沃玄齡

蟬音庵が号ではなく本名であることを特に表すための書き方だったとすべきであろう。蟬音庵の娘スミが、みずから「春夢」と号したかどうかも分からぬが、「春」はスに通じ、「夢」は「ゆめみる」だからミに通じるのであろう。これもあるいは逍遙がスミに与えた一種の愛称だったのかもしれない。

拙稿「中野逍遙」では「青年男女間の友情を、すくなくとも逍遙の方では実現しようとして」と書いたが、今ではむしろ、春夢子のほうが、逍遙に友情は持ったが恋愛には至らなかつたかもしれない、という気がする。外人について英語を学んだ開明の女史には、多情多恨の漢詩人はかわいそうではあっても、恋人とし夫とするには對陶しすぎ、逍遙のような男性のフェミニストは、女性のフェミニストから見ても滑稽で魅力がない、というようなことだったのでないだろうか。

伝記でも、小説でも、ドラマでも、それを書き、読む、いずれの側にたっても、主人公を中心にし、同情共感のあまり、周辺の人物にたいして主人公の側からの感じ方でのみ見ようとしがちだが、それぞれの立場に視点を移して検討することの必要性を痛感する。若林氏に教えられたところからすれば、春夢子その人が伝記を立てるに値する婦人のように感ぜられる。たれか女性のフェミニストで試みるひとはないものだろうか。

なお、改造社版『子規全集』第一七巻「漢詩稿」明治二十四年（四〇四頁）「書中野君所示文後」の中野君、「獺祭書屋日記」同二十五年九月二十六日（四四三頁）「登校。与漱石訪逍遙子於大久保。夕月に萩ある門を叩きけり」の逍遙子は、いずれも中野逍遙であろう。岩波本『遺稿』二二二頁の龍口了信（たつぐち・りょうしん）は広島市の真宗（西本願寺派）の僧で、夏目漱石とも共通の友人だった。すでに指摘されていようけれど。

歌人・大塚五朗

(一) 1990. 2. 18.

原田憲雄

幼時 (二)

一八九九年 五郎、二歳。本稿での年齢はすべて数えどしとする。

この年、三月二八日、のちの松子夫人が、萩原喜惣次(はぎわら・きそうじ)・タクの長女として、福島県伊達郡小手川村で生まれる。本籍は、福島県伊達郡掛田町字金子町二番地。このとき父喜惣次は同県安積郡中野村小学校長であった。母タクは同じ県の関根氏。

一九〇一年 五郎、四歳。

この前後に、父広は官吏をやめ、ある銀行の支店長となる。「秋草」(風土二二二二三)に次ぎのようにいう。

長い官吏の生活から身を退いて、或る銀行の支店長になつた父に、どんな内面的な苦勞があつたかは知らないけれど、朝夕の生活は誠に静かであつたやうだ。父が一体いつの頃から朝顔の栽培に凝り出したかはさつぱりわからないけれど、私の目の前には、殆ど二百鉢に近い朝顔の棚を前にして、朝の出勤前を、帰宅後の夕方を、如何にも余生を楽しむといったやうに、大きな如露を持つてゐる父の後姿が、特に綺麗に禿げあがつた臙頂が映画の大寫しのやうに浮びあがるのである。その中の一鉢を私が貰つたところから見れば、或は朝に夕に、父の足にからまるやうにして朝顔の手入れに余念のない父に親しんでゐたものとみえる。

一九〇二年 五郎、五歳。

このとし父広死去。行年五十歳。法名、厚徳院法広日忠居士。そのころのことを「夏の花」(風土二九一九三)に、

その頃私は母と二人きりで暮らしてゐた。淋しくはあるが穏かな、安らかではあるがかなしいあけ暮れであつた。未亡人としてはまだ若い母と、少年にしてはませた私と、二人のくらしには自ら花の饋えたやうなやるせなさが漂うてゐた。郡長の未亡人——何がさて明治三十年の郡長といへば豪勢なもので、そのつれあひの死んでしまつた現実にかいて、母にはまださめ切らない夢があつたらしい。長い夏の日も暮れて、ぼつかり狐火のやうに灯（とも）されたランプの下で、月琴（今は殆どこの楽器を知る人も少なからう）を爪弾きながら書々と剃つた眉を燻かせてその見果てぬ夢を母は追ふのであつた。窓から忍び寄る甘酸っぱい南瓜の花風が、一層やるせなさをかきたてて、ともすれば母の歌こゑはふるへ、爪弾く爪が乱れ勝であつた。

或日どうした事か、夕方おそくまで遊び呆けてた私が、母の夢を慕うて南瓜畑の道を急いでゐた時、家の格子戸が開いてこれはまあ何としたことか、珍しく酒に酔つたらしい母が、踵と出て来たではないか。私はつと物かげに身をひそめて息を殺した。その時私の体は一匹の女郎蜘蛛になつたのではなからうかと思はれる位ねばねばした感情に包まれてゐた。

畑の中程まで来た時、石にでも躓いたのか母はよろよろとよろめいて、よろめいたなりに畑の中に転んでしまつた。あはてて起き上がるかと思つてゐれば、起き上がりもせず坐つたなりで、——さきさほうかいなあ——口三味線で、如何にもたのしさうに唄ひ出したものである。黄色い南瓜の花と、夕闇にぼつかり泛き上つた母の白い顔と、私は遠い能舞台でも見てゐるやうな美しさに心のうづきをさへ感じてゐた。

十七まで殆ど傍去らず起居を共にした母に関する思ひ出の多いのは当然すぎる程当然であるが、火野葦平もどきにあげてみれば「母と芝居」「母と月琴」「母と煙草」「母と鯛饅頭」「母と南瓜の花」「母と基督」、そのいくつかを私は私の貧しい小説として書いたそれ程母は私の右にも左にもあるのである。楽しい母の姿、淋しい母の姿。明滅する母の灯の中で、「母と煙草」ほど私を淋しがらせるものはない。

今時、女の人が煙草を喫ふなどといふことは、まあ特殊な世界に住んでゐる人以外あまり見受けない事なんだが、私の母などは十七八の時からもう煙草の味を覚えたといふ。

私の目に浮ぶ母の姿で、一番母らしい姿は、長火鉢の傍に、一寸立膝をしながら、長い煙管で如何にもうまさうに一服の煙草を吸つてゐる姿である。眉を青々と剃り落とした母、鉄醬を黒々と染めた母、鼠がかつた小紋の着物に黒朱子の帯をしめた母。私にはどうしても煙草を吸つてゐてくれなければ、なつかしい母とはならないのである。

その煙草も、母は「萩」以外の煙草はすはなかつた。「萩」といへば撫子ほどではなくても安煙草のサンブルみたいにいはれた煙草であつたが、ヒーロー、ピンヘッドといふ煙草がなつかしい煙草であつたやうに、私には忘れ得ぬ煙草なのである。あの袋に刷られた茶色の萩の絵も亦嬉しい絵である。私が萩の花を心深く愛してやまないのはこの煙草の「萩」によつて養はれたものだとはいはないけれど、しかし少しのつながりもないとはまたいひ切れない、どこか宿命的な感傷さへもあるのである。

たぶんこの年、秋冬の間に、新潟県十日町の長兄広通の許に移住する。「雪」(続風土 二五〇、二五二)に、

父を亡くした私は、生まれ故郷の善光寺を捨てて母と一緒に、兄のある越後の十日町に引取られて行つた。今日でこそは地図の上で太々と鉄道の線も引かれ何かと不自由のない町になつてゐるけれども、何がさて今から三十年も前の越後の十日町といへば、越後上布でこそ多少その名を知られてゐたものの、兎も角汽車から九里も山の中に入つた、小さな町、しかも雪が一丈も積る寒い国、そこにどうして母は長くゐようといふものか。

「善光寺に帰りた。善光寺にかへりた。」

と子供のやうに訴えた。しかしさうした母の嘆きを外に、外では木枯が荒れ狂ひ、樹々は寒むさうにその葉をふるひ落とした。

そしてその後から毎日のやうにひそひそと冷たい時雨が狐色にこげた野山の枯葉を濡らしていつた。これがその土地の人の心をさへ耐へ難い憂鬱に引込まずにはゐない「半年は寝て暮す」北国の冬の前ふれであるのだ。この前触れが霊柩車のやうに通り返るころともなれば、家々の窓や戸口には、幾枚もの板を鋸の札（さね）のやうに組み合せた雪がこひが下ろされ、藁葺の屋根には雪おろしの丸太が漂木のやうに横たへられる。大きな囲炉裡がおこされ、物置には山のやうなボヤ（薪のこと）が積み込まれる。

町場へ出てみると通を挟んだ商家のガンゲ（道に面した櫛は一間も長く道に突き出されて、その下を人が通るやうになつてゐる）には炭すごが非人小屋のやうに垂らされ、道の所々には両側のガンゲをつなぎあはせる、これも板や炭すごで作られた新しいトンネルが設けられる。

風がぼつたり落ちて、どこかで瀬戸物の凍みるやうな鋭い気配がして夜が明けると、ああもう北国の野はすつかり雪の世界と化してしまふのだ。細かい雪だ。糠のやうに細かい雪だ。その細かい粉が、実にしんしんと雨のやうに降るのだ。一日、二日、三日——五寸、一尺、二尺、降り出したらいつ止むとも果しのない北国の雪は実に執拗に降るのだ。

「お母さん、とうとう来年の五月まで待たなければなりませんぜ。」
兄は今にも泣き出しさうな母の顔を見ながら、気の毒さうに笑ふのである。

長兄広通は五郎と年がはなれ、父に代って五郎の面倒をよくみた。その兄について「正月」（風土三四）に、
若い頃は兄弟の嬉しさや懐かしさ有難さに思ひ及ぶことは稀で、特に私のやうに五人の兄弟の縁も薄く生みなされ、育てられて来たものにとつては、しみじみと兄を思ふといつた気持も少く来てたものである。年のひらきが相当にあり、豊かでない生活の中に生まれ合せた兄弟であつてみれば、早くからそれぞれ身を立てる算段をしなければならず、一番末の弟の私が物心づくころには、上の兄二三人はすでに家にゐないといつた有様であつた。それでも一番上の兄は、父亡きあとの私にとつては、親代りになつて成人させてくれた関係もあり、随分一つ家にゐて厄介をかけたので、親しめば親しめる間柄なのだ、年も二十以上違つて居り、今いつたやうな関係のため、兄としての親しきよりも、どこか親のもつきびしさの方が心にしみこんで、甘えも出来ない淋しさにゐたのである。

以後一九一〇年にいたる間の消息は、いまでは知る人がないようだ。

霞網を広げる赤い木の芽

柔らかく染みるような雨

寒かった日々に見たゴイサギは

もう来ないだろうか

昼間は群れといっしょに木の上にいる夜サギが

明るい時刻になぜ一羽だけで

この庭へ舞い降りてきたのだろう

昔の人々は鳥を

突然に現れる祖先の霊と感じたという

池の縁に立ってじっと水面を見るゴイサギ

コイはいない キンギョは見えない

カエルはまだ眠ったまま ヘビも土の中

水草さえなくて小さな水溜まりに

枯葉が洗んでいる

黒緑の背 灰色の胸 いっぱいに開かれた大きな目

涙が吹き出すのか怒りが破裂するのか

自分にとまどいさえ感じながら

しだいに笑いに変わってゆくそんな目をいつか

怖れたことがあった

子供のころは夢の中でいつも逃げていた

何かに追われて土につまづきころびながら

動かない足にいらだち力をふりしぼって走った

ゴイサギは少し池の中を歩いてみることにする

やっばり何もいない

腐った落葉がむらっと動く

地を這うようにして近づく猫

どうしようというのだろう

ゴイサギは灰色の翼をひろげてゆっくりと

屋根へ飛び退く

「葉一本ひとの物を盗ってはならん」と

父が言ったけれどただ通り過ぎるだけで

踏みじり蹴散らしあんなにも人や物たちのやさしさを

だいなしにしてしまったではないか

もう黄色を感じさせているレンギョウ

空に手をあげて歌う桐の枝先のつぼみたち

だれをも傷つけず自ずから花開くものとして

生れたかった

どうかわたしがとても悪かったと悔やんでいることを

人々がそんなふうに責めたりしませんように

ゴイサギは空を見上げてさっと

風を切り飛びたつて消えた

夜のなわとび

1990. 2. 20.

原田慶

ビニール紐が闇をくぐり床をうち

だんだん速くまわりだし

調子が合わなくなつて足にからまる

数えなおしてなわとびをする

スーパーマーケットの広告の燈は消えているし

今夜は月も星もなくて

黒に紫などをまぜたおもたいたい空を

おし開くようにめりめりと

飛行機が行った

庭の木々は暗がりの中

シュロチクとジンチョウゲが並んで

すこしふるえながらきらきらしているのは

隣の三階の蛍光燈のせいらしい

向かいの寺の尼さんは

病院へ行って二年も帰って来ないのに

不思議にあかあかと灯すその庭の

底抜けの淋しさ

夏の夜の遠い祭りにぎわいは

笛と太鼓とざわめきと向うへ行ったり近くへ来たり

間遠になってふっと消え

また聞こえるかと待っていると

夜は急に更けるのだ

やっと帰った母親から小遣いをもらった少年が

祭りの終わった広場に立って

わあわあ泣いていたという

料理屋の青い電燈の部屋には

特別製の瓶詰をねかせているが

それを食べると元気が出るだろうか

こじんまりした二階屋では寝たきりの父親と娘さん

あしたもやってくる若者は

ヘルメットを脱ぎオートバイを道路に止めて

父親に機能回復訓練というのをさせ

娘さんには慰めをちよっと

置いて行くだろう

昼すぎ昨年の春に店を閉めた米屋のおばあさんに出会ったら

「毎度ありがとうございます」と言われたので

「はあ」とていねいにおじぎをした

やんちゃな孫が三人いてわたしも時々叱ったけれど

今は姿を見かけない

三百数えたらなわとびをやめる

夜は一つ深呼吸をするそしてささやく

「お静かにそろそろどなたもおやすみなさい」

中国の詩人と仏教

一一

1910.2.23.

原田憲雄

五、お経の翻訳

桓帝の治世は、後漢の朝廷にとっては下降の時代ですが、仏教の歴史では記念すべき時期です。というのは、はつきりと名の知れた坊さんがやってきて、お経を翻訳しはじめたのです。

まず安世高（あん・せいこう）。この人は、安清ともいい、安息国の太子だったが、父の王が死んだ時、王位を叔父に譲って、仏教を学び、諸国を遍歴し、桓帝の即位した一四七年前後に中国の洛陽にきて、それから約二十年の間に『安般守意（あんぱんしゅい）経』など三四部四〇巻を翻訳しました。安息は安息の音写で、今の

イラン地方に、前三世紀の中頃、アルサケス一世が立てた王朝で、イラン系バルティア人の国です。安世高のバルティア名はわかりません。「安」は安息国から来たひとの出身をあらわす中国での姓です。ここでついでに説明しておきますと、大月氏(月支)から来た人の姓は「支」、康居(ソグディアナ)から来た人の姓は「康」、同様にして、龟兹(クチャ)は「白」または「帛」、于闐(コータン)は「于」、天竺(インド)は「竺」を、姓とするのが慣習になりました。それで唐代の詩人白居易(楽天)も祖先はクチャ出身だろうといわれるのです。

さて、『安般守意経』は『大安般守意経』『仏説大安般守意経』ともいいます。「安般」は梵語の *Anāpāna* の音写で、*Anā* は息を吐き出すこと、*pāna* は息を吸い込むこと、「守意」は心を静めること、だから「安般守意」とは呼吸を調えることによって心を静める観法をいうわけで、後には「数息観」と漢訳されます。安世高は中国に來たばかりで、仏教術語の訳し方が分からないので、梵語を音写したものと意味をとった言葉を組み、間に合わせたのです。この経のはじめに、釈尊が九十日間すわって安般守意の行を続け、さらに九十日すわって考え、十方の人間や動物たちを救おうと決意したことが記され、「安とは清、般とは淨、守とは無、意とは為、つまり(安般守意とは)清淨無為のことなのだ。無とは活のこと、為とは生のこと、もはや苦にあうことがないから活かすことになるのだ。安は未、般は起で、ここが動きださないときはそのまま守意であり、心が動きだしたら動きださない状態にかえすのが守意なのだ」というように、言葉のひとつひとつを噛んで含めるように解き明かしながら、心身を安定させることによって、人を、動物を、世界を平和に導こうとする。釈尊の慈悲を説くのです。裏楷の上書に「黄老の道も浮図の教えも、清らかで無為を貴び、万物を生かすことを好み、殺すことを憎み、

欲望をおさえ……」と書いていましたが、『安般守意經』の初めにいうところと似ているではありませんか。襄楷がこのお経を読んでいたかどうかは分かりません。安世高の方が、このお経を訳すとき、中国人に親しみやすいように、道家の言葉を取り入れたのだと考えるべきかもしれません。ともかく両者の目指す方向には共通するものがあり、その共通するものを手懸かりとして、仏教の經典を中国人に紹介しようとしたのです。

安世高は、王子時代に古典はもとより、天文・医学・地理学・動物学・植物学などおよそ当時の学問といわれるすべての領域に通じ、出家してからは幻術や靈能にもすぐれたといわれます。故郷の安息国をいつ出でどこを通って何年かけてやってきたのか、まったく分かりませんが、ときどき馬や駱駝に乗ったほかは、てくてく歩いてきたはずで、そのあいだに道すがらの言葉を覚え、やがて行くべき中国の言葉も学んだでしょう。わが河□慧海師の『チベット旅行記』を読むと、師が肉体的に苦痛困難なヒマラヤ越え道中の日々にも、天候地理を観測し、人情風俗を観察し、言葉や思想・学術を学び、いたるところで出会った人の病を直し、苦痛をやわらげ、仏の教えを説くのに驚嘆します。そして反射的に、インドや西域から中国にやってきた坊さんたちのことが思われます。いまでは名も知られぬけれども、記録は残さなくとも河口師と同様の苦心精進を重ねたに違いなく、安世高もそうした一人だったのでしょう。もとは王子などという、目をみはり、英雄視するのが人情で、無名の人の功績まで英雄のものにしてしまうのが世間の習わしですが、われわれは有名な英雄に無名の人たちの事業と功績を読み取ればよいのです。安世高は洛陽に着くと一、二年後には翻訳に掛かっています。仏教の基礎的な概念や修行法を解説するような經典ばかりです。かれが小乗の部派の人だったからでしょうが、中国の人たちに仏

教を知ってもらうには、どのようなところから説いてゆけばよいかを早くから考えていただろうと推察します。後漢末の戦乱を避け南方に行き、路上でヤクザにいいがかりをつけられて死んだということですが、その訳経はまもなく注釈をつけられます。そうして後々まで、小乗をいやしむ大乘の人たちにまで学習されるのです。これは釈尊の教えを異境にも伝えたいという篤い信仰と、人々の苦しみを除きたいという慈悲が、質樸でときには難解な、おそらく当時の口語にちかい、訳文を通してでも伝わってくるからでしょう。

かれの訳したのは、小乗の部派のひとつである説一切有部(せついつきいぶ)の代表的な經典です。物事をあらわす言葉を、いったん分析し、それを総合しながら、形而上の領域までも体系化してゆきます。インドの思考法に共通する傾向でしょうが、それをさらに仏教的に洗練したものです。小乗といっても低級なものではなく、西洋でいえばアリストテレスのような学風といえよいか。説一切有部は学問的ではあってもたんなる学派ではなく、宗教団体ですから、修行法が重んぜられるのですが、かれの訳経が伝えた、分析しつつ総合する思考法は、儒教の經典注釈にも取り入れられ、中国人の思索の興行きを広げます。

安世高よりすこしおかれて、大月氏の支婁迦讖(し・るかせん)が桓帝の末年(一六七)に洛陽にやってきました。「支」はさきに言ったように大月氏出身をあらわし、「婁迦讖」は梵語 Lokakṣema(安穩世界)の音写。氏名を略して「支讖」ともいいます。この人は一七八年ごろから十年ほどの間に『道行般若(どうぎょうはんじや)経』『首楞嚴(しゅりやうごん)経』『般舟三昧(はんじゆさんまい)経』『阿闍世王(あじゃせおう)経』などの大乘經典十四部二十七巻を訳しました。これらについては問題が多いので次回に。

前回は「譬喩品」の「父の呼びかけ」で、火災の発生した家の中で遊びふけて、呼んでも出てこようとした子どもたちを、かれらの父が、好きなおもちゃで誘い出そうとするところであった。今回はその父の言葉から 3-14. 「子どもたちよ、あんたらが、あんたらのおもちゃとして魅力があり、楽しく、ふしぎで、珍しい物、手に入れなければ悔やむような、さまざまの色の、たくさんの種類の物があるんだ。牛の車、羊の車、鹿の車とかいったもの。あんたらの欲しがっていた、愛らしく、美しく、心を奪うような物を、みんなわたしが家の門の外においてきた、あんたらが遊ぶために。さあおいで、わたしたちのこの家から出ておいで。わたしはあんたらの求める物、欲しがる物、それをどれでも上げよう。さあおいで、早くそれをもたらうために出ておいで」

yāni tāni kuṃārakā yusmakam kriḍanakāni ramanīyakāny āścaryādūhutāni yeśāṃ alābhāt saṃtapyatha
 nānā-varṇāni bahu-prakārāni / tad-yathā go-rathakāny aja-rathakāni mṛga-rathakāni / yāni bhav-
 atām istāni kāntāni pryāni mana-āpāni tāni ca mayā sarvāni bahir niveśana-dvāre śhāpitāni yu-
 smākam kriḍana-heloḥ / āgacchantu bhavanto nirbhāvantv asmān niveśanād ahaṃ vo yasya-yasya ye-
 nārtho yena prayojanam bhaviṣyati tasmai tat pradāsyāmi / āgacchata śiḡhram teṣāṃ kārā-
 nam nirbhāvata /

ここが「三車の喩え」として『法華經』でも有名なところである。「三車」とはいうまでもなく牛車・羊車・鹿車をいう。妙本は、ここを、

汝らがもてあそび好むべきものは、希有にして得ること難し。汝もし取らずんば、後にならず憂い悔やまん。かくのごとき羊車・鹿車・牛車は、いま門の外にあり。もつて遊戯すべし。汝ら、この火宅よりよろしく速かに出で來たるべし。汝の欲するところに随つて、みなまさに汝に与うべし。

とし、梵本とほぼ合っている。ところが正本には、

倡伎絶妙の樂を鼓作し、戲笑相娛しつつ火厄より濟わん。まさに衆乘の象車・馬車・羊車・伎車を賜うべし。われ以て戲辦し、停めて門外にあり。速疾に走出し、出でて火災を避け、みずから欲するものを恣にし、意の樂しむところに從え。

とし、梵文や妙本にない「倡伎絶妙の樂を鼓作し」といった語句があり、車も四種類で、羊車のほかは違っている。子どもたちを家の外に導き出す手段としてだけなら、どちらでもよいと言うことになろうが、後で展開する三乗・一乗の論議へはたどりにくいであろう。『法華經』は、二八六年、竺法護によって漢語の全訳が完成された。これが『正法華經』すなわち正本である。しかし一部のひとを除いてはあまり研究しようとはせず、従つてその法義は一般に知られず、信仰されることもなかった。クマーラジーヴァが、四〇六年に再訳した。『妙法蓮華經』すなわち妙本である。この時から爆発的に研究され、信仰される。正本の分かりにくさが除かれたのと、クマーラジーヴァの透徹した理解とあつた信仰が生み出す訳文の麗しさが、読む人の心に響いたからであろう。

3-15. するとあの子どもたちは、遊び楽しむためのおもちゃで、望んでいたような、想像していたような、捜していたような、愛らしく、美しく、心を奪うような名前を聞いて、その燃えている家から、急いで、思いきって、勇ましく、すばやく、たがいに振りむきもせず、「一番はだれだ、まっさきはだれだ」と言いながら、たがいに押しあいへしあいし、その燃えている家から、急いで飛び出した。

alha khalu te kumārakās tesām kṛīḍanākānām ramanīyakānām arhāya yathepsitānām yathā-samkalpi-
tānām istānām kāntānām priyānām mana-āpānām nāmadheyāni śrutvā tasmād ādīptād agārāt ksipram
ev'ārabdhā-vīryā balavatā javenāyonyam apratīksamānāḥ kaḥ prathamam kab prathamataram ity an-
yonyam saṅghatīta-kayās tasmād ādīptād agārāt ksipram eva nirdhāvītaḥ ||

3-16. そのとき、その人は無事にうまく子どもたちが出てくるのを見て、心配がなくなったのを知り、部落の四つ辻の空地に坐り、喜びや楽しさがわきおこり、不安や悩みから離れ、心配がなくなるだろう。そのとき子どもたちは父のいるところに近かづき、そこに来ようというだろう「父さん、ちょうだい、あのいろいろな可愛いおもちゃ、牛の車だの、羊の車だの、鹿の車だのを」と。

さて、シャーリブトラよ、あの人は自分の子どもたちに、風のように速く走る車を与えるだろう。七宝づくりで欄干があり、鈴のついた綱がたれさがり、高く広く、世にも稀な宝玉をちりばめ、宝玉の瓔珞が輝き、華鬘を飾り、しとねや毛氈を敷き、サテンや絹の布で覆い、両側に赤いクッションが据えてある。輝くように白く速く走る牛がつかないであり、たくさんの人がついていて、旗を立ててある。そんなふうに風

の力と速きをもつ、おなじ形でおなじ種類の牛車を、ひとりひとりの子どもに与えるだろう。なぜなら、この人は、シャーリプトラよ、富豪で大きな財産があり、ゆたかな土蔵や穀倉をもっていて、こう考えるだろうから「わたしはこの子どもたちに、ほかの乗り物を与えることはすまい。なぜなら、すべてこの子どもたちはわたしの息子であり、すべてわたしにとっては愛すべき者、かわいい者だ。しかもわたしには、これとおなじような大きな乗り物はいくらでもある。この子どもたちは平等に考えるべきで、差別すべきではない。わたしはたくさんさんの土蔵や穀倉をもっていて、すべての人々にでも、このような大きな乗り物を与えることができる。ましてわが息子たちではないか」と。

子どもたちは、このとき、この大きな乗り物にのることができ、すばらしいこと、思いもかけないこととおもうだろう。

これをどう思いますか、シャーリプトラよ、この人がそれらの子どもたちに、前には三つの乗り物をしめしながら、のちにすべてに、大きな乗り物、優れた乗り物を与えたことは、いつわりではないだろうか。
atha sa puruṣaḥ kṣema-svasīnaḥ tām kumārakān nirgatān dr̥ṣtvā 'bhaya-prāptān iti viditv 'ākāśe
srāma-caṭvara upaviśtaḥ pṛīti-prāmodya-jāto nirupādāno vigata-nivaraṇo 'bhaya-prāpto bhavet /
atha khalu te kumārakā yena sa pitā tenopasaṅkrāmaṇn upasaṅkramyaivaṃ vedeyuḥ / dehinas tāta
tāni vividhāni kṛīḍanākāni ramaṇīyāni / tad-yathā go-rathakāny aja-rathakāni mṛga-rathakāni /
atha khalu śārīpūtra sa puruṣaḥ teṣāṃ svakānāṃ putrāṇāṃ vāta-java-saṃpannān go-rathakān evānup-

rayacchet sapta-ratna-mayān savedikān sakiṅkiṅī-jātibhipralambitān uccān pragrhitān āsāryād-
 bhuta-ratnālakṛtān ratna-dāma-kṛta-śobhān puṣpa-mālyālakṛtāms tūlikā-gonik'āstaraṇān dūśya-
 pata-pratyāstīrṅān ubhayaṭo lohītopadhānāṅ śvetaiḥ prapāṇdaraiḥ śīghra-javair goṇair yojitān
 bahu-purṣa-parigrhitān savaijayanān / go-rathakān eva vāta-bala-java-sappannānēka-varaṇānēka-
 vidhān ekakasya dārakasya dadyāt / tat kasya hetoḥ / tatnā hi śāriputra sa purṣa ādhyas ca
 bhaven mahā-dhanaś ca prabhūta-kośa-kośhāgāraś ca / sa evaṃ paśyet (¶:manyet) / alap ma eṣāṃ
 kumārakāṅāṃ anyair yānair dattair iti / tat kasya hetoḥ / sarva evaite kumārakā mamaiva putrāḥ
 sarve ca me pryā mana-ūpāḥ / saṃvidyante ca ma imāny evaṃ-rūpāṅi mahā-yānāni samam ca mayaitē
 kumārakāḥ sarve cintayitavyā na viśamam / aham api bahu-kośa-kośhāgārah sarva-satlvanām apy
 aham imāny evaṃ-rūpāṅi mahā-yānāni dadyām / kim ānga punaḥ svakānāṃ putrāṅāṃ / te ca dārakās
 tasmin samaye tesu mahā-yānesv abhiruhy 'āśāryādubhuta-prāptā bhavyeḥ / tat kim manyase śāri-
 putra mā haiva tasya puruṣasya mṛśā-vādah syād yena tesāṃ dārakāṅāṃ pūrvam trīṇi yānāny upada-
 rśayitvā pascat sarveṣāṃ mahā-yānāny eva dattāny udāra-yānāny eva dattāni ॥

燃えさかる家から子どもたちが無事に出てきたときの父の喜びは、梵文・正本・妙本ともに、いかにもさもあ
 ろうというふうに生きいきと描かれ、父が子どもに与えようとする牛車は、父の喜びそのままに、限りなく絢爛
 で、歓喜が沸き上がっているように感ぜられる。法義を説くための譬喩ということも忘れてしまうほどに。